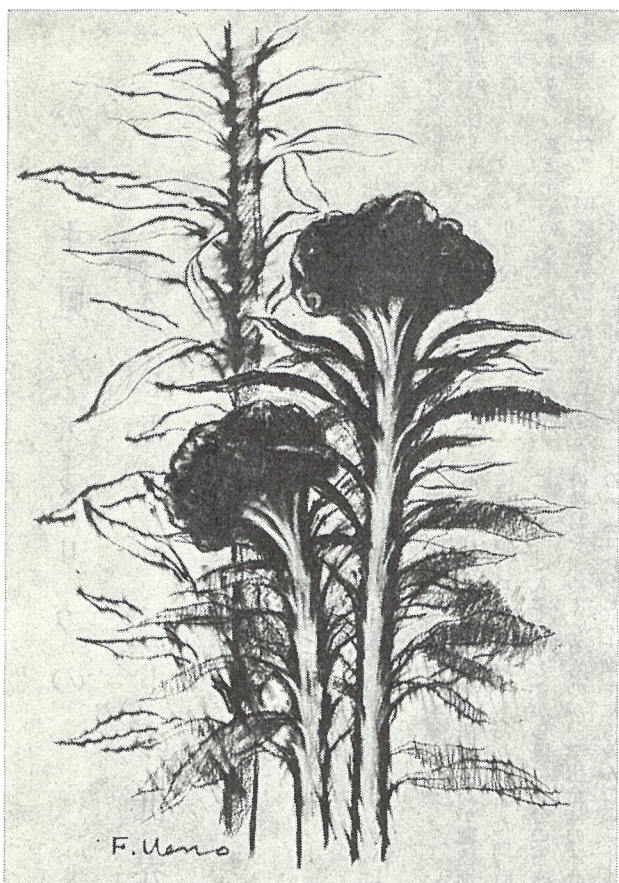




えと文
上野富二郎

鶏頭

夏も盛りには庭の草花も、熱く乾燥し切った土の上でじっと耐えている様子で、扇風機やクーラーでは満足せず、かき氷でやっと生きた心地だなんていつているわれわれに比べるとずいぶん苦勞なことだなぁと妙な感心の仕方をしたりする。やがてその草むらにも露が光り、土もしっとりとしてくると草花も息を吹き返す。鶏頭もちょうどそんなときにあの独特な、おおよそ花らしくない花が比較的長持ちして咲く。咲くというより赤いビロイド状のものが盛り上ってくるという感じだ。鶏頭とはうまくつけたものだ——シャモのトサカだな、これはきつと——。花としてのイメージからかけ離れているところにまず惹かれ、そして何よりもその太く力強い茎に魅力があるのだ。花らしくないとはいってもたいいていの花が時おり見せるある種のグロテスクな感じはちゃんとそなえているのだからその意味では花として精いっぱいアピールしているのかもしれない。典型的な花の美しさとは別の、めずらしいとか変っているというのではない、花らしくないこの花にも花としての魅力があり、一度じっくり描いてみたいと思っている花の一つである。

(女子中高教諭・美術)